

中国チベット族日本語学習者複合名詞アクセント習得の実態

柳 悦

1. はじめに

本研究は中国チベット族日本語学習者を対象に複合名詞アクセントの記憶・発音・知覚の三つの角度から縦断調査を通じて、習得実態を明らかにするものである。

海外の日本語学習者の多くはビジネスでの日本語利用が目的であり、そのため、より聞きやすい発音は聞き手にとって自ずと「母語話者のような発音」と考えられる。周知のように、日本語のアクセントは高低アクセントで、品詞によって、多種のアクセント型を有している。外国人学習者はそれらを正しく習得するためには、単語をたくさん聞いて、覚えて、そして実際に発音しなければならない。

これまでの研究をみると、中国人学習者の出身地域により日本語の音声習得に差があるという報告は主に中国の方言を基にした研究結果であった。しかし、中国には56の民族があり、漢民族以外の各民族はそれぞれの言語を使用し、それらの言語系統は極めて複雑である。近年中国の少数民族優遇政策に合わせて、各大学の外国語学院では積極的に少数民族の学生を取り入れている。したがって、少数民族の日本語学習者を対象とした研究が必要となってきた。しかし、これまで朝鮮族やモンゴル族の日本語学習者を対象とした研究はあったが、それ以外の少数民族を対象とした研究報告はまだほとんどない。そこで、筆者は中国の北方にある大学の日本語学科で学んでいるチベット族の学生に注目し、日本語複合名詞アクセントの縦断調査を行った結果を基に、初のチベット族学習者の日本語音声習得の現状を報告したい。

2. 先行研究

2.1 アクセント習得についての先行研究および問題点

外国人日本語学習者のアクセントの習得について、これまで比較的多くの研究があった(山田1994など)。中には1994～1998年度にかけて、文部省科学研究費(創成的基礎研究費)「国際社会における日本語についての総合的研究」(略称:新プロ「日本語」、研究代表者 水谷修)の中の「音声言語の韻律特徴に関する実験的研究」のうち「外国人日本語学習者による日本語アクセントの習得研究」という課題で実施された研究において、様々な言語を母語とする日本語学習者を対象に数多くの報告がなされた(鮎澤他1997、鮎澤他1998、鮎澤他2000、荒井1997、西郡他1997、西沼1997など)。これらの研究を通じて、外国人学習者はどのようなアクセント型の単語が習得しやすいか、あるいは習得しにくいのか、またその傾向などについてより明確に知ることができた。鮎澤(2003)では次の5点が挙げられている。

① 正答率は学習者の日本語学習歴には関係はなく、個人差が大きい。

¹ ここでいう「日本語」は共通語として認識された「東京語」のことを指す。

- ② 全体的な正答率に関係なく、ピッチの急な下がり目「なし」(平板型・尾高型)の正答率が高い。
- ③ 母語によって正答率の高いアクセント型が異なる。母語のピッチパターンに似たピッチパターンはよく聞き取れており、「知覚の転移」が見られる。
- ④ 同じ母語の学習者間では正答率の差がもっとも大きいのは頭高型である。
- ⑤ 正答率が低いグループの拍数別・アクセント型別正答率に母語別の特徴が現れる。
(鮎澤 2003, p54)

また中国人学習者を対象とした研究は上記のほかには、朱(1993)、野澤・重松(1998、1999)などがある。朱(1993)では「アクセントの統語機能に対する認識が不十分なため、中国人日本語話者はよく複合語や助詞、助動詞類をばらばらに読んでしまう。」ことや、「中国語では、高くて平らな音節(第1声)の連続する言葉も、また低い音節(第3声)の連続する言葉も少ない。(中略)したがって、中国人が日本語を話す場合、高い拍と低い拍が3つ以上連続したものは苦手」などと述べ、中国語の声調と比較し、中国人学習者のアクセント習得における特徴を明らかにした。

しかし、これらの先行研究をまとめると、主に下記の問題があると言えよう。

- i、調査手段は、主に聞き取り調査が多く、発音を用いたものが比較的少ない。更に、アクセント型に関する記憶と発音と知覚という三つの角度から総合的に調査を行ったことはほとんどない。
- ii、調査過程は主に横断調査のものが多く、縦断調査を用いた研究が少ない。
- iii、調査内容は主に1拍から5拍までの単語を対象としたものが多く、日本語の複合語に特有のアクセントが結合するという点に注目した研究は少ない。

特にiに関して、鮎澤(2003)でも「ピッチ下降を聞き取る能力とそのパターンを記憶し、自分が発話するときはそのパターンを生成する能力とがどのような関係にあるかについては今後の研究が必要である。」と述べられ、アクセントに関する記憶と発音と聞き取りを総合的に分析した結果こそ本当の習得傾向を反映した成果となるであろう。また時間や現場の条件の許す限り、縦断研究を用いるべきではないだろうか。一回だけの調査データは、その時その場の学習結果としか言えない。場合によって様々な外部の要因に左右されることも考えられる。最後に調査内容に関して、単語はもちろん重要であるが、実際のコミュニケーションで使うことを考えると、また日本語の複合語には特有のアクセントの結合があることから、長音節語や複合語の習得実態の調査にもっと力を入れるべきであろう。

2.2 筆者の前期研究および本稿との関係

2.1で述べた先行研究の結果と問題点を踏まえ、2007年から筆者は中国人日本語学習者を対象にアクセント習得に関する記憶、発音、知覚という三つの角度による縦断研究を続けてきた。北方方言話者を対象とした研究調査についてはすでにいくつかの報告があった(柳2008、柳2013など)。本稿のチベット族学習者への調査は北方方言話者への調査と同時に行われた。しかし、北方方言話者の100数名に対し、チベッ

ト族の学習者はたったの3名しかいないため、分析の母集団として成り立つことが困難と認識し、本稿はこの3名の習得結果をまず報告し、実態を明らかにすると同時に、今後の少数民族を対象とした研究調査の一環と位置付けたい。

3. チベット語の音韻体系

チベット語はユーラシア大陸の中央付近で使用されているシナ・チベット語族のチベット・ビルマ語、ヒマラヤ語群に属する言語である。

形態論において孤立語に分類されるが膠着語的な性質ももつ。方言による差はあるが、2種ないし4種の声調をもつ。

チベット語に用いられるチベット文字は、表音文字であり、起源はブラーフミー文字である。

ラサロ語(チベット語の主方言)においては高平調、高降調、低昇調(低平調)、低昇降調の4つが区別される。これらは発音されない子音が消滅した代償に発生したため、文字から予測する事ができる。具体的には核子音が有聲の時に低調(低昇調、低昇降調)となり、無聲の時に高調(高平調、高降調)となる。鼻音とyとlの単独時は低調で発音されるが先行子音があると高調となる。降調となるかどうかは発音されない末子音の種類と有無によって決定される。

多音節語になると日本語と同様の高低アクセントとなり、自立していない接尾辞としての2音節目と全ての3音節目以降は軽声となって高低が弁別に寄与しなくなる。具体的には一音節目+二音節目がそれぞれ高平 or 高降+高平 or 低昇=高高、高平 or 高降+高降 or 低昇降=高低、低昇 or 低昇降+高平 or 低昇=低高、低昇 or 低昇降+高降 or 低昇降=昇降といった組み合わせのアクセントとなる。¹

4. 調査対象および方法

4.1 調査対象

調査対象は初級1名Aさん、中級2名B、Cさん(ともに女性、18~19歳)の3名である。言語背景は共に母語はチベット語、第二言語は中国語、そして中学校・高校では英語を習ったが、大学に入ってから日本語を専攻するようになった。

4.2 調査方法²

本調査に用いた単語は、学習者の教科書『新版 中日交流標準日本語 初級(上下)』に登場する複合名詞で、毎回三つの調査では同じ単語を用いた。調査時間が学習者に負担にならないように、各回の調査用単語は22語で構成されている。単語の選出基準は下記2点である。

1. 学習者が使用する教科書『新版 中日交流標準日本語 初級(上下)』に登

¹ <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%81%E3%83%99%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9> より引用

² 詳細は柳(2013)で述べたため、ここで簡単にまとめることにする。

調査報告

場した単語であること（既習度重視）。

2. 基準1を満たした上で、複合名詞のアクセント型をできるだけ包括すること。

表1. 調査用 R 群単語の詳細

アクセント規則	アクセント型	単語
後部要素は中高型で、複合語アクセントもそれに従う	-3型	アイスクリーム、紙飛行機
後部要素は平板型・頭高型・尾高型で、複合語アクセントは後部第 I 拍まで高い中高型の単語	-2型	交通事故
	-3型	エアメール、サッカーボール、テレビゲーム、休憩時間、携帯電話
	-4型	ノートパソコン、マラソン大会、休日出勤、就職活動、色鉛筆、北アメリカ
後部要素は中高型だが、複合語アクセントは後部第 I 拍まで高い中高型の単語	-4型	電話番号、部品工場

注： 単語選定の結果、後部要素はともに漢字2字または3拍以上の名詞であり、よって表中のアクセント規則はそれを前提としたものである。

表2. 調査用 C 群単語の詳細

アクセント規則	アクセント型	第一回	第二回	第三回	第四回	第五回
前部が漢字2字以上または拍数が3拍以上で、後部が漢字1字・2拍名詞で、前部の最後まで高いもの	-3型	イタリア人	ブラジル人	オーストリア人	イギリス人	フランス
		ベトナム人	ロシア人	ドイツ人	中国人	外国人
前部が漢字2字以上または拍数が3拍以上で、後部が漢字1字・2拍名詞で、全体が平板化になるもの	平板型	外国語	中国語	フランス語	ドイツ語	韓国語
動詞・動詞からなる転成名詞で平板型になるもの	平板型	撮影禁止	駐車禁止	左折禁止	立入禁止	飲食禁止
後部は頭高型、平板型の3,4拍で、後部の1拍目にアクセント核を置くもの	-3型		海外旅行	往復はがき 晩ご飯	夏休み 修学旅行	航空会社
	-4型	キロメートル 映画鑑賞	東京大学			北京大学

そして複合名詞のアクセント規則に従って、まず一定の数の単語を選出し、それらを初回調査の前の個人アンケートと同時に単語の熟知度アンケートも実施した。そこから学習者にとって、熟知度が極端に低い単語を除き、候補となる単語を決定した。単語は4拍から8拍語により、2グループに分けた。一つは毎回登場する単語群で¹、

¹ 毎回同じ調査内容だと、反復練習だと思われがちで、また学習者が調査への慣れによる自然習得の枠から外れるという異議が予想されるが、本研究各回の調査の間隔は2, 3ヶ月となっていて、学習者は調査時間以外に、これらの単語を訓練目的で接するようなことがなかったため、また調査時にも反復練習などの行為がなかったことから、本研究で得たデータは自然習得の枠を超えてないとする。

外来語や漢語そしてカタカナと漢字による混合表記の単語計 16 語からなる。本調査ではこのグループを固定群（略称「R 群」）と称する。R 群のアクセント規則と単語の詳細は表 1 に示す。

次に毎回の調査で交替する単語 6 語を設け、5 回の調査では計 30 語がある。それらは主にシリーズとして登場する。本調査ではこのグループを交替群（略称「C 群」）と称する。C 群のアクセント規則と単語の詳細は表 2 に示す。また R 群と C 群の選出及び登場の順番は熟知度と関係なく、すべて無作為に行った。

調査手順：本研究は学校教育の環境における中間言語として学習者がどのような複合名詞アクセント規則を形成するのかを見るのが目的であるため、調査の順番として、モデル音声を与える「知覚」が最初に実施してはいけないことと、「記憶」が「発音」の影響を受けないようにするという考えから、「記憶」→「発音」→「知覚」という順とした。

各調査の詳細：「記憶」はシートに学習者が各自の内省でアクセント型を書くテストである。「発音」は本来録音室で行うべきだが、実際の調査現場ではこのような設備がなく、全 5 回一年間に渉る調査を実施するために、時間、機材、学習者への負担と録音場所の確保などが事実上困難のため、録音は学習者からやや離れた教室の隅でボイスレコーダーを使って録音した。録音に入る前はまず学習者の「記憶」のシートを回収し、アクセント表記が書かれていない読み上げシートを使い、すべての単語を 2 回ずつ読み上げた。最後の「知覚」の刺激語の読み上げは日本語教育関係者でアナウンス訓練経験のある 50 代の男性 1 名によって録音された。録音方法はパーソナルコンピュータの外部マイク入力端子から Sound It! 4.5 (Internet 社) を用いて録音した。サンプリングレートは 44.1kHz、16bit、モノラルである。音声編集ソフトは Cool Edit 96 を使用し、1 単語の 1 回目と 2 回目の間には 1 秒のポーズを入れ、各刺激語間には 4 秒のポーズを入れた。また本調査の刺激語の前には、練習用単語が 5 語収められている。これらをデータ CD-R に保存し、調査当日は CD プレーヤーを使って聞かせた。

分析方法：本調査における三名のチベット族学習者についての分析は北方方言話者と同時行ったため、ここでは柳 (2013) で述べた分析方法を簡潔にまとめる。アクセント型に関する記憶と知覚調査は結果を数量化してから、学習者の解答パターンを集計し、正答率や誤答パターンなどを統計手法で分析を行う。発音調査に関しては、録音した音声をまず筆者がアクセント型を判定し、その結果を日本人日本語教育関係者（東京出身）による再判定を行った。ここで得た両者の一致度は 99.5% だった。しかし、データの信頼性をアップするために、まず判定基準が安定であるかどうかを検証する必要がある。そこで、筆者が自身で判定したものの一部に対し、後日再判定を行い、一致度は 99.8% であることが分かった。さらに、筆者と日本人日本語教育関係者の一致度を検証するため、すべてのデータの 5 分の 1 を後日別の日本人日本語教育関係者（東京出身）が再判定し、Cohen's Kappa¹ をかけた。その結果、三者間それぞれ

¹ <http://www.mizumot.com/stats/kappa.htm> を参照

調査報告

の κ 値は0.98、0.93、0.94であることから、データの信頼性が保証されたと考えられる。最後にごく少数の評価が分かれた音声について、音声分析ソフト「Speech Analyzer 2.4」でピッチ曲線による判定を行った。判定結果をすべて数量化してから、学習者の回答パターンを集計し、正答率や誤答パターンなどを統計手法で分析を行う。

5. 結果

5.1 記憶調査

記憶調査の結果として、図1から図6で示したように3名の第1回から第5回までの正答率は、同学習背景の北方方言話者より毎回平均15%低いことが分かる。また習得の伸びもやや鈍いことが分かる。一年間の変化を見ると、北方方言話者の緩やかに上昇し続けているのと違って、チベット族の学習者はアップダウンが激しく、特に中級の2名は前回との差の多くは±15%ほどで、学習時間の増加による上達はあまり見られない。

図1 初級学習者記憶調査における全単語の正答率

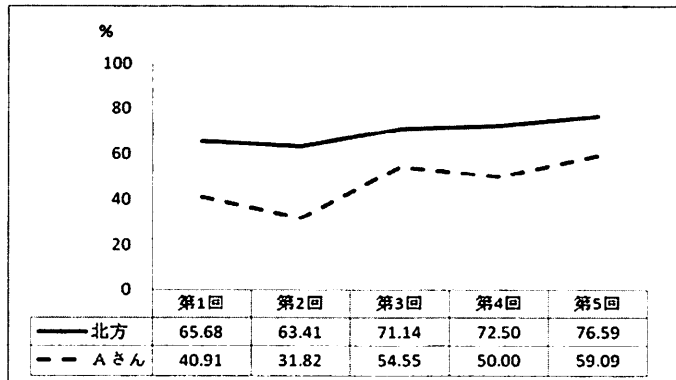


図2 初級学習者記憶調査におけるR群の正答率

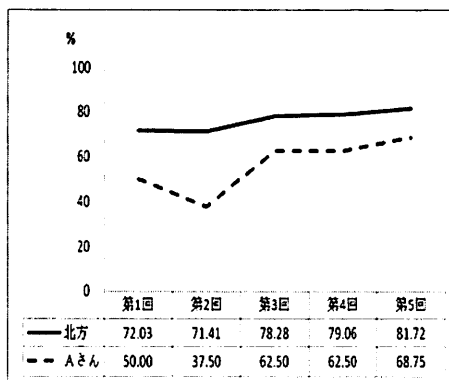
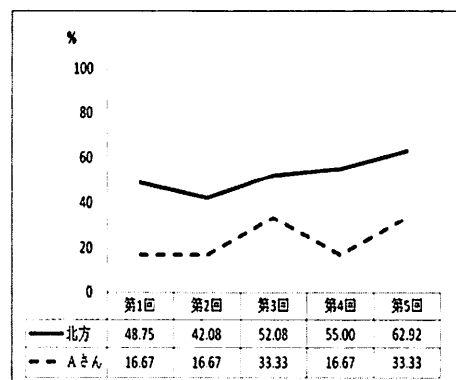


図3 初級学習者記憶調査におけるC群の正答率



誤答パターンをみると、北方方言話者と近似したものの、二重母音や特殊拍のところはピッチの下がり目だと思っている答えは北方方言話者より比較的多いことが分かる。例えば「マラソン大会」について、北方方言話者の中でもっとも多い誤答は「平板型」だが、チベット族の学習者はそれを「-3」や「-6」と回答することがある。また「部品工場」の場合、北方方言話者の「平板型」と「-2」の回答に対し、チベット族学習者は「-3」と回答することがある。

図4 中級学習者記憶調査における全単語の正答率

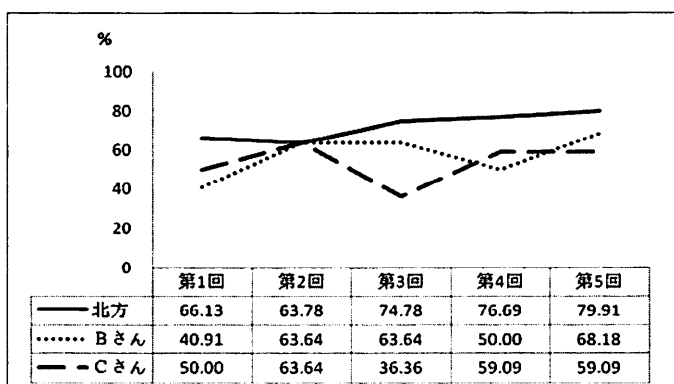


図5 中級学習者記憶調査におけるR群の正答率

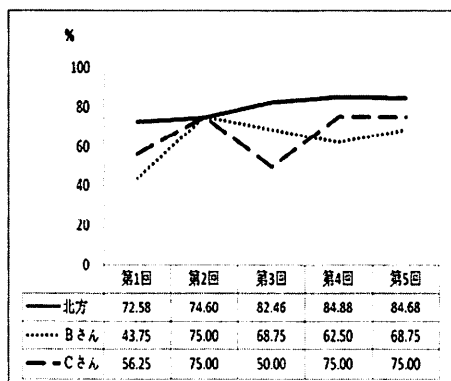
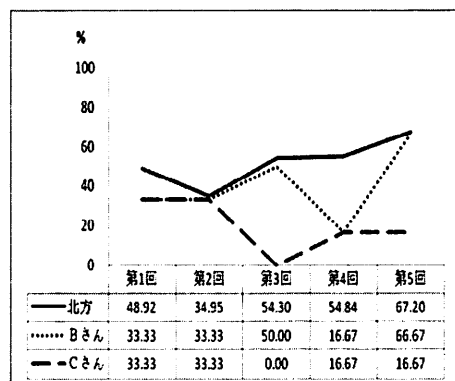


図6 中級学習者記憶調査におけるC群の正答率



5.2 発音調査

発音調査の結果を図7から図12まで示す。そこから3名の第1回から第5回¹までの正答率は、北方方言話者に比べ20~30%低いことが分かる。さらに、一年間の成績

¹ 初級Aさんの第5回の発音について、機械故障のため収録できなかった。よって、初級Aさんの5回目発音のデータが欠けている。

調査報告

について、北方方言話者の右肩上がりの曲線に比べ、3名ともアップダウンが大きく、習得のスピードも遅れていることが分かる。

図7 初級学習者発音調査における全単語の正答率

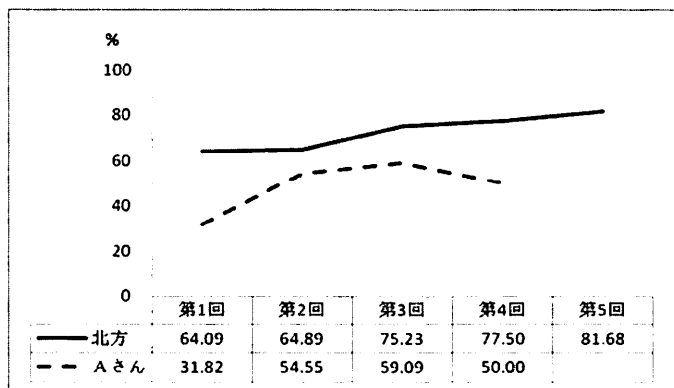


図8 初級学習者発音調査におけるR群の正答率

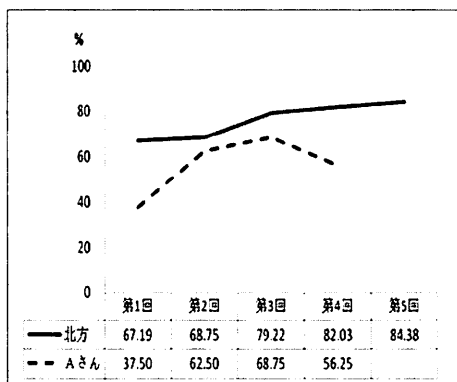


図9 初級学習者発音調査におけるC群の正答率

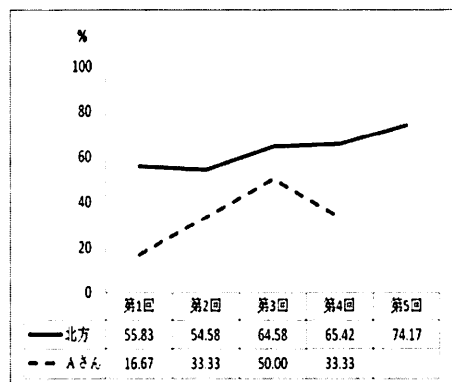


図10 中級学習者発音調査における全単語の正答率

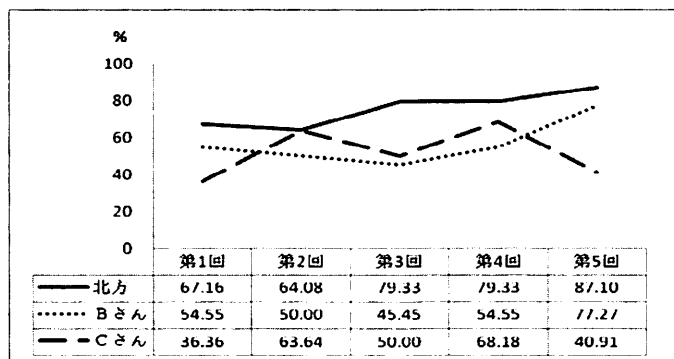


図 11 中級学習者発音調査における R 群の正答率

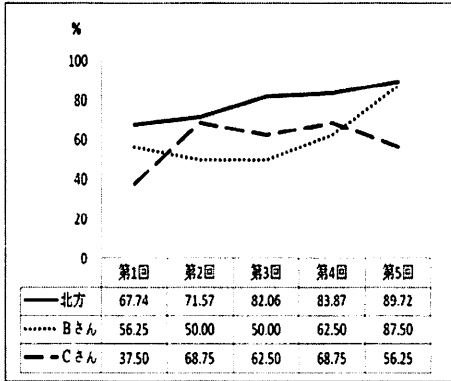
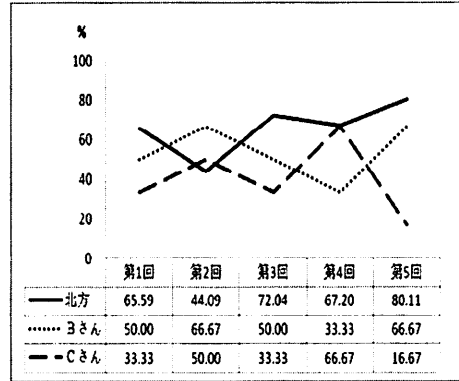


図 12 中級学習者発音調査における C 群の正答率

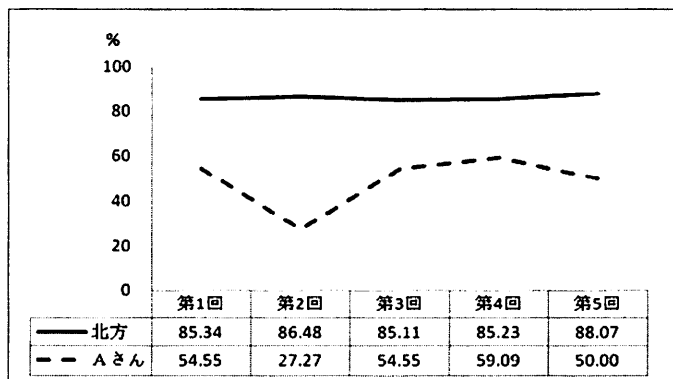


そして、誤答パターンをみると、北方方言話者にもよく見られる二度上がりをもつとも多い。例えば「アイスクリーム」を「○●●○●○○」（○は低、●は高）と、「休日出勤」を「○●●●○●●●」と発音することがある。また頭高型は比較的多く発音されている。例えば「テレビゲーム」について、北方方言話者のほとんどの正解と比べ、チベット族の学習者はそれを「●○○●○○」と発音したり、そして「ロシア人」を「●○○●○」と発音する傾向がある。

5.3 知覚調査

知覚調査の結果を図 13 から図 18 に示す。そこから 3 名の第 1 回から第 5 回までの正答率は、北方方言話者の平均正答率 (85%) より大幅に下がっていることが分かる。特に初級の A さんは第 2 回はもっとも低く 27.27% で、ほかの 4 回もほとんど 50% 台で、一年間の学習進歩が見られなかった。そして中級の B さんと C さんは全体的に上昇が見られたが、C 群の単語に関しては不安定な結果となった。

図 13 初級学習者知覚調査における全単語の正答率



調査報告

図 14 初級学習者知覚調査における R 群の正答率

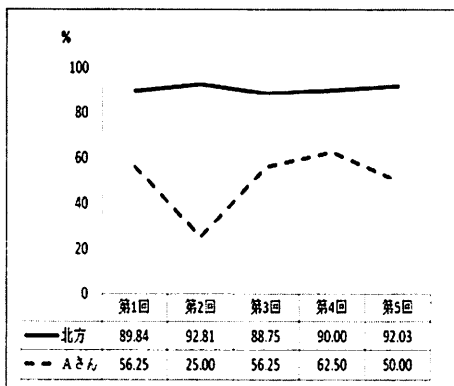


図 15 初級学習者知覚調査における C 群の正答率

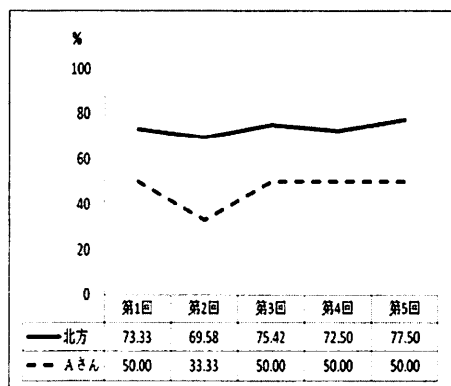


図 16 中級学習者知覚調査における全単語の正答率

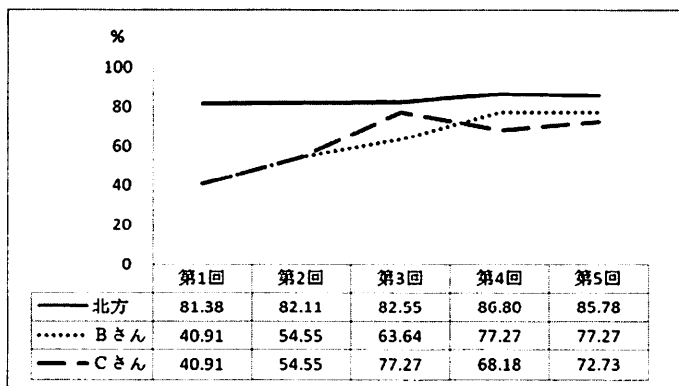
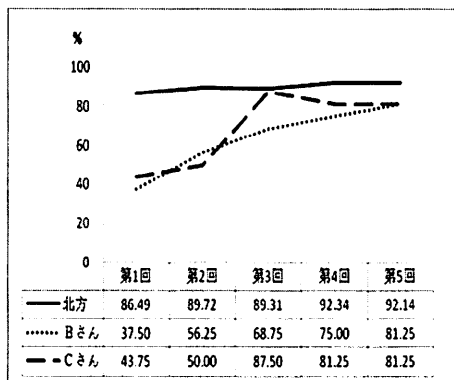


図 17 中級学習者知覚調査における R 群の正答率



C 群の正答率

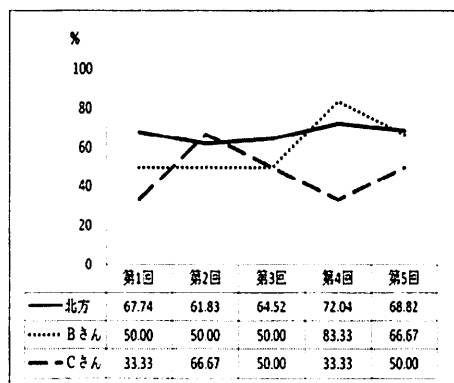


図 18 中級学習者知覚調査における

そして、誤聴パターンをみると、「アイスクリーム」の場合、北方方言話者には「-4」の誤聴がもっとも多いが、チベット族学習者に関しては「頭高型」の回答が多い。また平板型や二重母音にピッチの下がり目が来るという回答も北方方言話者より比較的多いことが分かる。例えば「テレビゲーム」や「紙飛行機」などがある。

6. 考察

本稿はチベット族日本語学習者のアクセント習得の実態について述べるため、また筆者はチベット語について学習経験がないため、今回は母語干涉の分析を行わず、同学習背景の北方方言話者との比較を主な分析手段とする。

まず一年間の追跡調査による習得の変化を見ると、記憶、発音、知覚の観点からはチベット族学習者はともに北方方言話者より進歩が遅れていることが見て取れる。確かに最終回は初回より正解率が上がったが、途中経過を見ると、成績の上下が激しく、また個人差はあるが、同じ間違いを繰り返しやすく、習得状態は非常に不安定であることが分かる。その原因について、考えられるのは複数の言語による学習者の言語背景なのではないだろうか。彼女たちへの日本語教育に使われている中国語はチベット族学習者にとって母語のチベット語に次ぐ第二言語ではあるが、大学入学前の学校教育ではやはりチベット語を使用することが多く、彼らにとって中国語はバイリンガルのような使用頻度ではない。そのため、中国語による日本語教育は同学習背景の北方方言話者より支障が起きやすいのではないだろうか。それは主に文法学習に表れているが¹、発音になると、彼女たちの中でどのような方法によって習得したのか、つまり母語のチベット語の発音体系に参照したのか、それとも中国語と対照して発音の習得に臨んだのか、それは調査後彼女たちへのインタビューからはっきりとした情報は得られなかった。しかし、同じ間違いを繰り返しやすいという習得過程を見ると、彼女たちの日本語習得には複数の言語の影響があるのではないかと考えられる。

次に誤答パターンについて見てみたい。全体的では中国北方方言話者に近似しているところがあるという点から、中国語の学習環境がもたらした結果なのではと考えられる。そして、複合語の発音における二度上がり現象は先行研究²でもよく指摘されていることから、外国人学習者に共通する学習過程と考えられる。しかし、チベット族学習者によく見られる「頭高型」の発音と誤聴は北方方言話者の中ではそれほど顕著ではないことから、チベット語の「2音節目と全ての3音節目以降は軽声となる」という声調変化による母語干涉の可能性が高いのではないかと推測する。

7. 今後の課題

今回筆者はチベット族学習者3名のデータを取り、これまでなかった中国チベット族の学習者を対象とした日本語アクセント習得の調査を行った。しかし、データ数が

¹ 調査後、筆者による個別会話で得た情報に基づく。

² 朱 (1993)、代田 (1997)、松崎 (2008) など

少ないため、個人例として扱うことしかできない。中国には漢族以外に 55 の少数民族があり、その中に日本語学習がもっとも多い学習者群としては東部と北部の朝鮮族やモンゴル族などがあるが、チベット族のような南部、西部の少数民族に注目した研究を今後もっと多く取り入れ、習得実態と母語干渉の原因を探るべきと思う。また少数民族間の比較研究も必要だと思う。母語や学習者の第二言語、第三言語による影響なども視野に入れ、よりよい教授法を見出したい。

参考文献

- 鮎澤孝子 (2003) 「外国人学習者の日本語アクセント・イントネーション習得」『音声研究』第 7 巻第 2 号, 47-58
- 鮎澤孝子・楊立明・磯村一弘・西沼行博・小高京子 (1997) 「北京語母語話者による東京語アクセントの知覚」『21 世紀の日本語音声教育に向けて』新プロ「日本語」平成 8 年度研究成果報告書, 13-21
- 鮎澤孝子・小高京子 (1998) 『『東京語アクセントの聞き取りテスト』21 言語グループの母語別・成績群別正答率』『国際社会における日本語についての総合的研究 研究論文集 1』新プロ「日本語」総括班, 57-71
- 鮎澤孝子・西沼行博・河津基 (2000) 「アクセント習得の縦断研究——3 年半の調査結果——」『第 14 回日本音声学全国大会予稿集』日本音声学, 177-182
- 荒井雅子 (1997) 「東京語アクセントの聞き取りテスト」縦断調査結果報告——京都滞在のアメリカ人学習者の場合——」『21 世紀の日本語音声教育に向けて』新プロ「日本語」平成 8 年度研究成果報告書, 73-79
- 朱春躍 (1993) 「中国語話者の日本語アクセントの習得——その特徴と指導上の問題点をめぐって」『国際化する日本語 話し言葉の科学と音声教育』1993 第 7 回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編, 179-184
- 代田智恵子 (1997) 「日本語アクセントの習得とイントネーション——フランス語母語話者による日本語発話の音調特徴とその要因——」『世界の日本語教育』7 号, 113-135
- 西郡仁朗・八山京子 (1997) 「北京語母語話者による東京語アクセントの聞き取りの習得——日本語学習初級段階における詳説と練習の効果——」『21 世紀の日本語音声教育に向けて』新プロ「日本語」平成 8 年度研究成果報告書, 81-88
- 西沼行博 (1997) 「アメリカ人・フランス人日本語学習者のアクセント聞き取り——母語干渉による知覚のゆがみ——」『21 世紀の日本語音声教育に向けて』新プロ「日本語」平成 8 年度研究成果報告書, 5-12
- 野澤素子・重松淳 (1998) 「広東語話者の日本語学習におけるアクセントの問題について (1) ——長音節を中心にして——」『日本語と日本語教育』第 27 号, 慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター紀要, 1-20
- 野澤素子・重松淳 (1999) 「広東語話者の日本語学習におけるアクセントの問題について (2) ——撥音節、促音節、二重母音音節を中心にして——」『日本語と日本語

- 教育』第 28 号, 慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター紀要, 1-16
- 松崎寛 (2008) 「複合語アクセント規則指導における効果」『広島大学日本語教育研究』第 18 号, 35-41
- 山田伸子 (1994) 「日本語アクセント習得の一段階——外国人学習者の場合——」『日本語教育』第 83 号, 日本語教育学会 108-120
- 柳悦 (2008) 「複合名詞アクセントの知識と聞き取りの習得——中国北方方言を母語とする日本語学習者への追跡調査——」『日本語研究』28 号, 東京都立大学・首都大学東京 日本語研究会, 17-29
- 柳悦 (2013) 『日语复合名词语音语调学习之研究——日本語複合名詞アクセント習得の研究』台湾高文出版社

(りゅう ゆえ・中国人民大学講師)